

指定候補文化財調書

- 1 名称及び員数 福伝寺の弘安銘板碑 1基
- 2 文化財の種類 有形文化財（歴史資料）
- 3 所在地 厚木市王子1-11-40
- 4 所有者の所在地及び名称 宗教法人福伝寺
- 5 構造・法量 緑泥片岩製 高さ91.5センチメートル（残存部）
67.5センチメートル（現況露出部分）
幅 44.2センチメートル
厚さ 4.0センチメートル
- 6 所 見

本資料は、王子地区の福伝寺に伝わる板碑である。現状では福伝寺境内に立てられているため、下部については観察することはできないが、幅44.2メートルは市内最大の規模である。

福伝寺は山梨県都留市の曹洞宗長生寺の末寺で、開山は長生寺11世白鳳宗淑（寛永14年（1637）没）であるが、古くは王子権現社（王子神社）の別当であった真言宗善福寺の跡地に建てられたと伝わる。

板碑は鎌倉時代から室町時代前期にかけて多く造立された死者の供養のために造立された石製の塔婆であり、厚木市周辺では、主に秩父（埼玉県）産の緑泥片岩を用いて造られる。形状は頂部を山形とし、その下に二条の切り込みと額部を作り、身部には主尊を仏像または梵字の種字で表す。その下部には願主名、年紀、供養の内容などの文字が刻まれる。

本資料は古くから存在が知られており、渡辺崋山の『游相日記』や『新編相模国風土記稿』においても取り上げられている。元来は福伝寺の北西約100メートルに位置する王子権現社に所在していたものが、明治初年の神仏分離に際し、福伝寺に移されたものと考えられる。

秩父産の緑泥片岩を石材として製作されており、厚木市内に普遍的に分布するいわゆる武蔵型の板碑である。頂上部が4分の1ほど斜めに欠けているため全容は明らかではないが、残欠からは、阿弥陀如来の来迎図及び円輪で囲んだ六地藏を表す種子が描かれていることが分かる。その下部には、一部が欠損するが、浄土三部経の1つである観無量寿経の偈である「光明遍照十方世界 念仏衆生 攝取不捨」の4行が記されていたとみられる。また、その下部には、造立意図及び弘安4年（1281）の紀年銘が記されている。本資料は「過去慈父聖霊往生極楽頓証菩提」とあるように、「慈父」の極楽往生を目的として造立されたものであるが、造立者である子が誰を示すのかは、記銘がないため不明である。

なお、本資料において注意すべき点としては、文末に刻まれている「相模守平時頼」の銘が挙げられる。「相模守平時頼」は、鎌倉幕府第5代執権の北条時頼（1227～1263）を示すものである。弘安4年が時頼の没後18年に当たり、年代的に齟齬があるとともに、明らかに書体も他の銘文と異なることから後刻として取り扱う必要があるが、板碑自体の制作年代を弘安年間とするのは妥当なものであると考えられる。

以上のことから、本資料は市内における最古かつ最大規模の貴重な板碑例であり、地域の歴史に対する理解を深める上で、極めて重要な文化財であると考えられる。

なお、板碑の残欠部分については、昭和40年代までは存在が確認されていたが、現在、所在が明らかでないため、所有者に所在の確認を依頼中である。

※参考

《新編相模国風土記稿》

王子権現社 社地に弘安古碑と称するものあり

弘安四年辛巳三月日、相模守平時頼と刻す、今年は時頼卒後十八年に当れり、是も後人の贗造なり

《游相日記》

坂東 之一林村。有相模入道時頼之碑

【参考文献】

蘆田伊人校訂 1970『新編相模国風土記稿』

厚木市 1989『厚木市史 中世資料編』

1999『厚木市史 中世通史編』

厚木市教育委員会 1986『游相日記』



【銘文】

光明遍照

卅万世界

念仏衆生

損取不捨

右志者為過去慈父聖靈

往生極樂頓證菩提乃
至法界衆生平等利益

弘安四年 辛三月日

「相摸守平時頼」(後刻)